第 233 号
受 47.9.-1 付
内閣官房
内閣参事官室

内閣総理大臣様

私たち広島折鶴の会会員六名は、この度、韓国政府、韓国原爆被害者援護協会の招待で三度目の韓国訪問をしてまいりました。

そして、あちらでひどい在韓被爆者の現状を私たちの目で見、私たちの耳で生の声を聞いてまいりました。

広島折鶴の会は広島に住む女子中学・高校生の平和を願う少女の会であり、約30名の会員で成り立っています。

現在、私たちの活動は、平和公園の一角にある原爆の子の像のそうじ、折鶴の管理をはじめ原爆病院の慰問、海外の平和親善を行っております。

この度の訪韓で、私たちは二軒の被爆者の家庭訪問をしました。自分たちの目で見、耳で聞いた状態をくわしくお話しします。

一軒目の姜さんは自分で起きることもできず、二畳程度の狭い部屋に寝ていらっしゃいました。昨年十月、広島から韓国被爆者治療のため派遣された医師団からいただいた薬も一週間分

だけだったそうです。
姜さんは二十七年前使っていた日本語を思い出しながら強く私たちに訴えられました。
「韓国に原爆は落ちていない。なのになぜ二万三千人といわれる韓国人被爆者が今もなお苦しまなくてはならないのか。我々は好んで広島に行ったわけではない。」まだまだいろいろなことを訴えられました。
この話を聞いた時私たちは涙を止めることができませんでした。
こんな状態のままでほっておいてよいのでしょうか。
法の上では日韓条約でかたずいたことかもしれません。
しかし現実にこのようにして苦しんでいらっしゃる方々が韓国に二万三千人もいらっしゃるのです。そのうち30%が重度患者で姜さんと同じような状態だそうです。
姜さんの訴えを聞いて私たちは日本人であることをはずかしく感じました。
次に行った李さんは「原爆のためうばわれた この二十七年間とこれからの将来を保障するお金がほしい。保障金がほしい」と訴え

同封してあるのは、李さんの写真で原爆の復跡です。
貧しくて医者にもかかれず、薬も買うことができない状態で日本政府からも韓国政府からも見放され、忘れられた方々をそのままにしておいて日韓のほんとうの親善交流はありえないと強く感じました。そこで私たちのお願いですけれど、この度行なわれる、日韓閣僚会議の議題に在韓被爆者の援護問題を是非とり上げていただきたいのです。聞くところによりますと、この度の閣僚会議では、樺太に住んでいる韓国人のひきあげ問題のような人道的なものもあるそうです。私たちの小さな力では、どうにもならない韓国人被爆者の援護を日本、韓国の両政府の力で行なっていただきたいと思います。
ジェット機一台買うお金があればソウルに原爆病院が建てられます。ライオンズクラブではパプチョン地区に原爆病院を建てるため貯金をしているそうです。私たちも毎月千円づつではありますがそのために協力しております。
病院はお金が集れば建てられます。しかし、その後の運営は

是非　日本国政府にやっていただきたいと思います。
現実を見てきた私たちが　在韓被爆者の方々にしてあげられる
ことは、閣僚会議の議題としていただけるようお願いすることが
精一杯です。
広島の少女たちの心からのお願いを是非かなえて下さい。
よろしくお願いいたします。

一九七二年　八月三十日
広島市的場町二丁目六-四　国光ビル
広島折鶴の会　韓国訪問団一同

内閣総理大臣様